

## キルギス語の使役文について\*

大崎紀子

### 0. はじめに

キルギス語<sup>1</sup>における使役表現は、動詞語幹に使役接尾辞を付加する形式によって示される。

(1) a *Men kat jaz-dī-m.* 「私は手紙を書いた」

私 手紙 書く-過去-1単

b *Men kat jaz-dīr-dī-m.* 「私は(誰かに)手紙を書かせた」

私 手紙 書く-使役-過去-1単

この使役接尾辞は、動詞語幹に付いて新たな動詞語幹を派生する派生接尾辞であり、この新たに派生した動詞語幹を動詞使役形と呼ぶ。

チュルク諸語の使役表現に関しては、これまでトルコ語などを分析対象とした研究が盛んに行なわれてきたが、キルギス語に関する記述や研究は、あまり多くない。そこで、本稿では、キルギス語の使役文に関する基本的なデータを整理し、その全体を概観することに努め、これにより、キルギス語の動詞使役形の形態的な特徴や、使役文の統語的な特徴を明らかにする足がかりとしたい。

本稿で考察の対象とする使役文とは、正確に言えば、使役接尾辞によって派生した動詞使役形を述部にもつ文をさす。一般に、使役 (causation) とは、ある主体が何らかの行為によって他の主体の位置変化や状態変化などの“できごと”を引き起こ

\* 本稿は2000年6月日本言語学会第120回大会で口頭発表したものに加筆修正したものである。口頭発表に際し、多くの方々から貴重なコメントをいただきました。ここに心から感謝いたします。

<sup>1</sup> ここで扱うキルギス語は、1991年8月に旧ソ連邦から独立したキルギス共和国に住む約240万人のキルギス人によって使用されている現代キルギス語をさす。キルギスタン以外では、カザフスタン、ウズベキスタン、タジキスタンに10万人以上、中国の新疆ウイグル自治区に約11万人の話者がいるとされている。データ収集に関しては、首都ビシケク出身で元京都大学教育学部研究生の Айнура Жумагулова さんにインフォーマントとしてご協力頂いた。キルギス語の正書法では、1940年以後キリル文字が採用されている。本稿におけるキルギス語の表記は、それをローマ字翻字したものである。翻字法は次の通りである。

a=a б=b в=v г=g д=d e=e ё=yo ж=j з=z и=i й=yу k=k л=l м=m н=n ң=η o=o ө=ö  
п=p р=r с=s т=t у=u ү=ü ф=f х=x ц=c ч=č ш=š щ=šć ъ=" ы=i ь=' э=e ю=yу я=yа

すことを意味する概念である。そこで、キルギス語における *Al ešik aç-ti*。「彼はドアを開けた」という文もまた、使役文 (causative sentence) と呼ばれるのが一般的である。しかし、この文は述部に動詞使役形を含むものでないため、ここでは考察の対象としない。

本稿の構成は以下の通りである。まず、第1節ではキルギス語における使役接尾辞の種類と分布について述べる。キルギス語の使役接尾辞は数種類あり、その種類と分布については、既にいくつかの記述がなされている (胡 1986, Kudaybergenov 1987 など)。これらの先行研究では、どのような動詞語幹にどの使役接尾辞が接続するかがおおむね整理されているが、それぞれの記述には十分でない点が見受けられる。そこで、使役接尾辞の種類と分布について確認し、先行研究に若干の補足を行いたい。

次に、第2節において、キルギス語の使役文の構成について述べる。具体的には、キルギス語の使役文の構成や特徴を、補語がとる格の関係を中心に考察し (2.1 及び 2.2)、同様の観点からいわゆる二重使役文についても考察を加える (2.3)。

また、キルギス語には再帰を表す接尾辞が使役接尾辞とは別に存在するが、動詞使役形を含む文においても、再帰的な意味を伴って用いられる場合がある。このような使役文の再帰的用法について、第3節で述べる。

そして最後に、使役接尾辞 *-dir-* (母音調和及び子音同化により *-dir-*, *-dur-*, *-dür-*, *-tir-*, *-tir-*, *-tur-*, *-tür-* の異形態がある) と *-giz-* (同じく *-giz-*, *-guz-*, *-güz-*, *-kiz-*, *-kiz-*, *-kuz-*, *-küz-* の異形態をもつ) の意味的な使い分けについて指摘する。先行研究によれば、この二種類の使役接尾辞は、動詞語幹に相補分布的に接続し、どちらの使役接尾辞が付加されても特に意味の違いはないかのように扱われている。しかし、実際には、両方の接尾辞の接続を許し、異なる二種類の動詞使役形をもつ動詞語幹が少なからず存在する。このとき、二つの動詞使役形の間には顕著な意味の違いが見られない場合は確かに多い。しかし、そこに微妙な意味の違いが見られ、二つの動詞使役形が巧妙に使い分けられる場合があるということについては、あまり知られていない。この問題について、第4節で述べることにする。

## 1. 使役接尾辞の種類とその分布

### 1.1 先行研究について

どのような動詞語幹にどの使役接尾辞が付くかは、動詞語幹の形態的・音韻的条件により、およそその傾向を認めることができるとされている。胡 (1986) によれば、以下の如くである。

(2) 胡 (1986) による記述<sup>2</sup>

- ① *-dir-*, *-dir-*, *-dur-*, *-dür-* ; 単音節の動詞語幹で、語幹末が *r, y* 以外の有声子音及び母音であるものに付く。

(例) *bil-* 知る      *bil-dir-* 知らせる  
*juu-* 洗う      *juu-dur-* 洗わせる

- ② *-tir-*, *-tir-*, *-tur-*, *-tür-* ; 単音節の動詞語幹で、語幹末が *ʃ, č* 以外の無声子音であるものに付く。

(例) *tik-* 縫う      *tik-tir-* 縫わせる  
*sat-* 売る      *sat-tir-* 売らせる

- ③ *-giz-*, *-giz-*, *-guz-*, *-güz-* ; 語幹末が *r, y* の動詞語幹に付く。

(例) *kir-* 入る      *kir-giz-* 入らせる  
*kiy-* 着る      *kiy-giz-* 着させる

- ④ *-küz-*, *-küz-*, *-kuz-*, *-küz-* ; 動詞語幹の語幹末が一定の無声子音の場合に付く。

(例) *jet-* 届く      *jet-küz-* 届ける  
*küt-* 待つ      *küt-küz-*<sup>3</sup> 待たせる

- ⑤ *-t-* ; 多音節の動詞語幹で、語幹末が *r, y* 及び母音であるものに付く。

(例) *ište-* 働く      *ište-t-* 働かせる  
*azay-* 減る      *azay-t-* 減らす

- ⑥ *-ir-*, *-ir-*, *-ur-*, *-ür-* ; 単音節の動詞語幹で、語幹末が *ʃ, č* であるものに付く。

(例) *tüš-* 落ちる      *tüš-ür-* 落とす  
*kač-* 逃げる      *kač-ir-* 逃がす

- ⑦ 例外もいくつかある。

*ket-* 行く      *ket-ir-* 行かせる  
*čik-* 出る      *čig-ar-* 出させる  
*öl-* 死ぬ      *öl-tür-* 死なす, 殺す

このほか、Kudaybergenov (1987) や Imart (1981) にも使役接尾辞の種類と分布についての記述が見られる。胡 (1986) がキルギス語の使役接尾辞の中でも生産性の高いものだけを取り上げて整理しているのに対し、Kudaybergenov (1987) はより網羅的に、あまり生産的でない接尾辞も含めて、その分布に関する記述を行って

<sup>2</sup> 例えば、胡(1986)において「-dər」とあるものは「-dir-」とするなど、表記については筆者が修整を加えている。

<sup>3</sup> Yudaxin(1965)に、*küt-*「待つ」の使役形として記載されているのは *küt-tür-* のみであり、胡(1986)のいう *küt-küz-* という形は確認できなかった。

る<sup>4</sup>。生産的でない接尾辞も扱っている点では Imart (1981) も同様であるが、どのような動詞語幹に付加されるかという分布傾向の記述は、ごく簡略なものにとどまっている。それぞれの整理の仕方には若干のずれがあるので、単純に比較することはできないが、それぞれの記述には明らかに食い違う点が見つかる。

そのうち、本稿で扱う問題に関係するのが使役接尾辞 *-dir-* (*-dir-*, *-dur-*, *-dür-* 以下 *-dir-* で代表させることがある。母音調和による異形態に関して他の接尾辞についても以下同様とする。) に関する記述である。胡 (1986) は上記(2)の①のように、「単音節の動詞語幹で、語幹末が *r, y* 以外の有声子音及び母音であるものに付く」としているが、Kudaybergenov (1987) では「有声子音及び母音で終わるすべての動詞語幹に付く」としている。筆者が調べたところでは、語幹末が *r, y* である動詞語幹には、(2)の③にいうように、*-giz-* が接続することが多い。しかし、使役接尾辞 *-giz-* が接続する動詞語幹には、次のように、*-dir-* も使役接尾辞として接続する場合が少なからず見られる。

(3) <i>ur-</i>	殴る, ぶつける	<i>ur-guz-</i> , <i>ur-dur-</i>	殴らせる, ぶつけさせる
<i>ber-</i>	与える	<i>ber-giz-</i> , <i>ber-dir-</i>	与えさせる
<i>koy-</i>	置く	<i>koy-guz-</i> , <i>koy-dur-</i>	置かせる
<i>küy-</i>	燃える	<i>küy-güz-</i> , <i>küy-dür-</i>	燃やす

従って、胡 (1986) の記述があくまで大まかな分布傾向を示したにすぎないということを考慮に入れても、使役接尾辞 *-dir-* の分布に関しては、Kudaybergenov (1987) の記述の方がより正確だということになる。

このように *-dir-*, *-giz-* 両方の使役接尾辞の付加を許すものは、語幹末が *r, y* の場合だけに限らず、語幹末が母音の場合にも見られる。また、語幹末が無声子音であっても、*-tir-*, *-kiz-* 両方の接尾辞が付くものがある。

(4) <i>je-</i>	食べる	<i>je-dir-</i> , <i>je-giz-</i>	食べさせる
<i>kuu-</i>	追う	<i>kuu-dur-</i> , <i>kuu-guz-</i>	追わせる
<i>tart-</i>	引く	<i>tart-tir-</i> , <i>tart-kiz-</i>	引かせる
<i>čeč-</i>	ほどく	<i>čeč-tir-</i> , <i>čeč-kiz-</i>	ほどかせる

(3)や(4)のように、*-dir-*, *-giz-* あるいは *-tir-*, *-kiz-* 両方の使役接尾辞が接続する場

<sup>4</sup> 本文(2)に挙げられているもの以外にも、例えば、*-gaz-* (*-gez-*, *-goz-*, *-göz-*), *-kaz-* (*-kez-*, *-koz-*, *-köz-*), *-gar-* (*-ger-*, *-gor-*, *-gör-*), *-kar-* (*-ker-*, *-kor-*, *-kör-*)など、低母音を含む使役接尾辞がある。

合について言及した先行研究は今のところ見当たらない。多くの場合、このような二つの動詞使役形の間には顕著な意味の違いは見られないが、筆者の調査によれば、両者の間には微妙な意味の違いがあり、それらが使い分けられる場面があるようである。この問題については、第4節で詳しく述べる。

また、胡(1986)は、(2)の②及び⑥に挙げたように、単音節の動詞語幹の場合は、語幹末が *š, č* なら使役接尾辞 *-ir-* が接続し、それ以外は *-tir-* が接続するとしている。しかし、動詞語幹末が *š, č* なら *-tir-* が全く接続しないのかというと、そうではない。例えば、(4)の *čeč-*「ほどく」*čeč-tir-*「ほどかせる」の例のほかに、*šaš-*「急ぐ」*šaš-tir-*「急がせる」、*ač-*「開ける」*ač-tir-*「開けさせる」のように、語幹末音 *š, č* の後に *-tir-* が接続する場合も少なくない<sup>5</sup>。

## 1.2 第二次派生以降の使役接尾辞

使役接尾辞の分布に関して、確認しておかなければならないことがもう一つある。それは、胡(1986)などで記述されているキルギス語の使役接尾辞の分布傾向は、あくまで動詞語幹に最初の派生接尾辞が付加された第一次派生に関するものであるということである。キルギス語においては、本稿で考察する使役接尾辞以外にも、受身・再帰・共同ないし相互といった様々な派生接尾辞を動詞語幹に付加することができる。これらは互いに重複して付加することができ、次のような新たな動詞語幹を派生する。

(5) <i>kör-</i>	見る	<i>kör-üş-</i>	会う	<i>kör-üş-tür-</i>	会わせる
		見る-相互-		見る-相互-使役-	
<i>ur-</i>	ぶつける	<i>ur-un-</i>	ぶつかる	<i>ur-un-t-</i>	ぶつからせる
		ぶつける-再帰-		ぶつける-再帰-使役-	
<i>say-</i>	突き刺す	<i>say-il-</i>	突き刺される	<i>say-il-t-</i>	突き刺されさせる
		刺す-受身-		刺す-受身-使役-	
<i>kir-</i>	入る	<i>kir-giz-</i>	入れる	<i>kir-giz-dir-</i>	入れさせる
		入る-使役-		入る-使役-使役-	

<sup>5</sup> この点、Kudaybergenov (1987:250)は、*-tir-* の分布に関して、「*č, t, k* で終わる動詞語幹を除くすべての(無声子音で終わる)動詞語幹に付く」としている。しかし、本文で見たように、*t* で終わる動詞語幹に *-tir-* が接続する例は多く見られる。また、*t* で終わる動詞語幹には、*-tir-* をとるものと *-kiz-* をとるものがあるが、分布に偏りがあるとは言えない。さらに、*k* 終わりの語幹に至っては、もっぱら *-tir-* を使役接尾辞としてとり、一部 *-ir-* という別の使役接尾辞をとるものがあるだけである。従って、本文で述べたように、*-dir-* の分布に関しては胡(1986)よりも Kudaybergenov (1987)の方が事実に対して忠実だと言えるが、*-tir-* に関する Kudaybergenov (1987)の記述は理解しにくいものであると言わねばならない。

*bayla-* 縛る *bayla-n-* 執着する *bayla-n-iš-* 執着しあう *bayla-n-iš-tir-* 執着しあわせる  
 縛る-再帰- 縛る-再帰-相互- 縛る-再帰-相互-使役-

胡 (1986) は, (2)の②及び⑥のように, 単音節の動詞語幹の場合は, 語幹末が *o*, *ə* なら使役接尾辞 *-ir-* が接続し, それ以外は *-tir-* が接続するとしているが, (5)のように, 必然的に多音節となる第二次派生, 第三次派生の段階では, この傾向はあてはまらない。すなわち, 共同 (相互) 接尾辞 *-(i)š-* に後続する使役接尾辞はもっぱら *-tir-* になる。

使役接尾辞 *-t-* についても, 第一次派生と, 第二次派生以降では, 接続の条件が異なる。第一次派生の段階では, (2)の⑤のように「多音節の動詞語幹で, 語幹末が *r, y* 及び母音であるものに付く」が, 第二次派生以降では, 受身接尾辞 *-(i)l-*, 再帰接尾辞 *-(i)n-* に後続して使役接尾辞 *-t-* が付加される。

さらに, (5)の *kir-giz-dir-* 「入れさせる」のように, 使役接尾辞が重複して付加されることも多い。この場合は, 「ある主体が, 他の主体に命じて (あるいは他の主体を介して) 別の主体にある動作を行わせる」という二重の使役文を作ることができる。これについては, 2.3 で述べる。

## 2. キルギス語の使役文

キルギス語の使役文には, 大きく分けて二種類のものがあると言われている (Kudaybergenov 1987)。それは, 自動詞使役文と, 他動詞使役文である。前者は, 自動詞の動詞使役形を述部にもつ使役文であり, 後者は, 他動詞の動詞使役形を述部にもつ使役文である。どちらにおいても, 使役主体が主格 (格を示す接尾辞はつかない) で示される点は同じだが, 被使役主体の格表示については, 両者間において明確な違いがある。そこで, 本節では, それぞれの使役文について, 被使役主体がどのような格で示されるかという問題を中心に考察する。2.1 で自動詞使役文について, 2.2 で他動詞使役文について述べたのち, 2.3 ではいわゆる二重使役文について考察を加える。

なお, ここで他動詞とは対格補語をとる動詞をいい, 自動詞は対格補語をとらない動詞をいう, と定義しておくことにする。

### 2.1 自動詞使役文

自動詞の使役形としては, *oltur-guz-* 「座らせる」, *kir-giz-* 「入らせる」, *kal-tir-* 「残らせる」などがある。これらを述部にもつ文は, 次のように構成される。

- (6) a *Eje uul-u-n ĵan-i-na oltur-guz-du.* 「姉は彼女の息子を傍に座らせた」  
 姉 息子-3 所-対格 そば-3 所-与格 座る-使役-過去-0 (3 単)
- b *Biz anı̇ üy-übüz-gö kir-giz-di-k.* 「私たちは彼を私たちの家に入らせた」  
 私たち 彼(対格) 家-1 複所-与格 入る-使役-過去-1 複
- c *Ayša bala-sı-n üy-gö kal-tır-dı.* 「アイシャは子供を家に残らせた」  
 アイシャ 子供-3 所-対格 家-与格 残る-使役-過去-0 (3 単) (Kudaybergenov 1987 より)

(6)の例は「ある主体(使役主体)が、他の主体(被使役主体)にある動作をさせる」という意味を表している。これらの例から分かるように、自動詞使役文における被使役主体は対格で示される。自動詞使役文における被使役主体が、次のように与格などで示されることはない。

- (7) \**Eje uul-u-na oltur-guz-du.* 「姉は息子(与格)に座らせた」  
 姉 息子-3 所-与格 座る-使役-過去-0 (3 単)

キルギス語の伝統的な文法記述においては、(6)のように「他の主体にある動作をさせる」という意味を表す自動詞使役文を“使役文”と規定していた。そこで、次のような自動詞使役文は「使役本来の意味を表すものではない」とされ、このときの自動詞使役形は、対格で示された目的語に向けた働きかけを表す“他動詞”だとされた<sup>6</sup>。

- (8) a *Men Azamat-tı̇ mektep-ke jet-kız-di-m.* 「私はアザマトを学校に送り届けた」  
 私 アザマト-対格 学校-与格 着く-使役-過去-1 単
- b *Al bak ös-tür-ö-t.* 「彼は木を育てる」  
 彼 木 育つ-使役-現在-3 単
- c *Aynek-ti üç-ünçü jol-u sını̇n-dır-dı-ı̇nar.* 「お前たちは3回ガラスを壊した」  
 ガラス-対格 3-序数 回-3 所 壊れる-使役-過去-2 複

(8)のそれぞれの例では、(8a)「アザマトが学校に着くこと」、(8b)「木が育つこと」、(8c)「ガラスが壊れること」という行為や状態変化を、潜在的あるいは可能的に含んでいると認めることができる。そして、これらの自動詞使役文が表しているのは、それらの行為や状態変化を「強いる、促す」という間接的な意味ではない。(8a)では「(車などで)送り届ける」、(8b)では「育つように面倒を見る、育てる」、(8c)

<sup>6</sup> 例えば Kudaybergenov (1987) も、基本的にこのような伝統的な文法記述の考え方に従っている。

では「壊す」という、被使役主体に向けられたより直接的な行為を表している。

しかし、キルギス語の場合は、(6)のような間接的あるいは強制的な使役を表すものと、(8)のような直接的な働きかけによる使役を表す自動詞使役形との間に形態的な区別が原則的にないので、両者の関係はあくまで連続的であり、その間に明確な境界を引けるものではない。例えば、(6b)や(6c)の例は「被使役主体に命じてある動作をさせた」という意味にも、また(8)のような直接的な働きかけによる使役の意味にも理解できる。従って、仮に(6)のような自動詞使役文と(8)のような自動詞使役文を意味的に区別して前者を使役文、後者を“他動詞”文と呼ぶとしても、そのような区別が文法上重要かどうか疑問だということになる。

ただ、ごく稀に、上記のような自動詞使役文の意味的な区別が、動詞使役形の形態の上に反映される場合がある。これについては第4節で述べる。

## 2.2 他動詞使役文

### 2.2.1 被使役主体を示す格と二重与格使役文

次に、他動詞の使役形を含む使役文を観察する。他動詞使役文では、被使役主体は与格で示される。

- (9) a *Al bir ayal-ga nan koy-dur-up, čay kuy-dur-a bašta-dī.*  
彼 1 女-与格 パン 置く-使役-副動詞 茶 注ぐ-使役-副動詞 始める-過去-0(3 単)  
「彼はひとりの女にパンを置かせ、お茶を注がせ始めた」 (Kudaybergenov 1987 より)
- b *Al maga bul iš-ti Asan-dan sura-t-ī.*  
彼 私(与格) この 件-対格 アサン-奪格 尋ねる-使役-過去-0(3 単)  
「彼は私にこの件をアサンに尋ねさせた」 (胡 1986 より)
- c *Ayša bala-si-na tamak je-dir-di.* 「アイシャは子供に食事を食べさせた」  
アイシャ 子供-3 所-与格 食事 食べる-使役-過去-0(3 単)

次のように別の与格補語（間接目的語など）が同時に文中に存在しても、他動詞使役文における被使役主体が与格で示されるという原則は保持される。

- (10) *Ömürbek Ayša-ga maga sūröt körsöt-tür-dü.*  
オムルベク アイシャ-与格 私(与格) 写真 見せる-使役-過去-0(3 単)  
「オムルベクはアイシャに(命じて)私に写真を見せさせた」

トルコ語の研究においては、このような二重与格をもつ使役文 (double-dative causative) をめぐって、1970 年代以来盛んに議論が行われてきたようである (川口



1999 参照)。そこでは、(10)のような与格補語の連続が容認されるかどうか議論の要点の一つであった。一方、キルギス語では、(10)のような与格補語の連続が許される。この場合、与格補語が連続するので、どちらが被使役主体で、どちらが間接目的語か紛らわしいということになるが、それは語順によって判断される。即ち、動詞に近い方が間接目的語であると判断されるようである。

但し、ここで注意しておかなければならないのは、(10)の例は、筆者が調査のために人工的に作った文をインフォーマントに確認してもらったものであって、実際の用例から見つけたものではないということである。つまり、すべての補語をあえて一つの文中に表すとすれば、(10)のようになるということである。実際の会話や用例では、文脈によって、どちらかの与格補語が省略されることが多い。このことは、キルギス語においても、与格補語の連続が好んで用いられるわけではないということを示していると考えられることもできる。

### 2.2.2 二重対格使役文

上述のように、他動詞使役文では被使役主体が与格で示されるが、実は、これが対格で現れる場合も存在する。Yudaxin (1965) からは、次のように被使役主体が対格で示される例を見出すことができる。

- (11) *Kičinekey kiz-dī/kiz-ga kozu kaytar<sup>7</sup>-t-ti.*  
 とても小さな 女の子-対格/女の子-与格 子羊 守る-使役-過去-0(3 単)

「彼はとても小さな女の子に子羊を守らせた」

また、2.2.1の(9c)において、被使役主体が与格で示される例を挙げたが、これを対格で示した場合はどうかをインフォーマントに確認してみたところ、次のように、非文にはならないという。

- (12) *Ayša bala-si-n tamak je-dir-di.* 「アイシャは子供を(対格)食事を食べさせた」  
 アイシャ 子供-3所-対格 食事 食べる-使役-過去-0(3 単)

(11)や(12)の例においては、被使役主体が対格で表示された結果、一つの他動詞使役文の中に二つの対格補語が存在するということになる。しかし、このような二重

<sup>7</sup> *kaytar-* という動詞語幹については、形態的には自動詞 *kayt-*「かえる」に使役接尾辞 *-ar-* が付加されたものと分析できる。Kudaybergenov (1987) はこれを自動詞使役形の例として挙げているが、牧畜に関連する表現では、形態的に単純な他動詞として、家畜などを「守る、放牧する」という意味で用いられる。

の対格補語が常に許容されるわけではない。キルギス語においては、対格補語が意味的に特定・限定されていない場合に限って対格接尾辞を省略することができるのだが、(11)や(12)のように二重対格が許容されるのは、少なくとも、直接目的語の対格接尾辞が省略されている場合に限定されるようである。従って、次の例のように、対格補語が特定物であり対格接尾辞を備えている場合には、被使役主体を対格で示すことはできない。

(13) *Ayša bala-si-na / \* bala-si-n ene-si al-ıp kel-gen alma-ni je-dir-di.*

アイシャ 子供-3 所-与格 子供-3 所-対格 母-3 所 取る-副動詞 来る-GAN<sup>8</sup> リンゴ-対格 食べる-使役-過去-Ø(3 単)

「アイシャは子供に母が持ってきたリンゴを食べさせた」

なお、他動詞使役文における被使役主体が与格で示された場合と、対格で示された場合の意味的な違いについては、今のところ詳しいことは分かっていない。インフォーマントによれば、*je-*「食べる」には、*je-dir-*「食べさせる」と *je-giz-*「(同)」という二つの使役形があり、前者は与格補語と、後者は対格補語と結びつく傾向があるのではないかという。そして、前者「与格補語+*je-dir-*」の場合は被使役主体が自分から主体的に食べている状況を、後者「対格補語+*je-giz-*」の場合は使役主体が積極的に食事の用意をして被使役主体に無理やり食べさせている状況を、インフォーマントは思い浮かべるといふ。この問題については、使役接尾辞 *-dir-* と *-giz-* の違いについて述べる第4節で再び言及する。

### 2.3 二重使役文

他動詞使役文における二重与格、二重対格の問題を扱った直後なので、名称は紛らわしいが、ここで、一般に二重使役文と呼ばれているものについて、ここで見ておきたい。

単純な使役文は、使役主体が被使役主体にある動作をさせる、というものであったが、二重使役文では、使役主体と、実際の動作を行う被使役主体との間に「中間の使役主体」とでも言うべき別の主体の介入が表される。具体的な例を見てみよう。

(14) a *Sen Erkin-di oyno-t.*

「君はエルキンを遊ばせろ」

君 エルキン-対格 遊ぶ-使役-Ø(命令 2 単)

<sup>8</sup> *-gan* という接尾辞(及びその異形態)は、動詞語幹に付いて、おおよそ「～した(もの)」という意味を表す。一般に過去の動作を表し、動詞が名詞を修飾するときこの形式が用いられる。また、動詞語幹に *-gan* が付いた形は、そのまま名詞としても用いられる。

b *Sen Erkin-di Kulʃan-ga oyno-t-tur.*

君 エルキン-対格 クルジャン-与格 遊ぶ-使役-使役-0(命令2単)

「君はエルキンをクルジャンに(命じて)遊ばせろ」

(Kudaybergenov 1987 より)

(15) a *Ayša bala-si-na tamak je-dir-di.* 「アイシャは子供に食事を食べさせた」

アイシャ 子供-3 所-与格 食事 食べる-使役-過去-0(3単)

((9c)の再掲)

b *Ayša Kulʃan-ga bala-si-na tamak je-dir-t-ti.*

アイシャ クルジャン-与格 子供-3 所-与格 食事 食べる-使役-使役-過去-0(3単)

「アイシャはクルジャンに(命じて)子供に食事を食べさせた」

(14a)は自動詞使役文であり、その被使役主体は対格で示されている。これに対して、(14b)の述部動詞は *oyno-t-tur-* という、自動詞に二重の使役接尾辞が付いた形になっており、これによって「中間の使役主体」の介入が表される。この「中間の使役主体」である「クルジャン」は、与格で示されることになる。

また、(15b)では、*je-*「食べる」という他動詞に使役接尾辞が二重に付加された形が述部動詞になっている。これは、その動作を行う「動作の被使役主体」と、文の主語である使役主体との間に、別の「中間の使役主体」が存在することを表す。(15b)から分かるように、この「中間の使役主体」もまた与格で示されるので、「動作の被使役主体」とともに二つの与格補語が並ぶことになる。

このようにして「中間の使役主体」を次々に増やしていくことが、理論的にはできそうだが、実際には動詞語幹に接続できる使役接尾辞の数に限界があり、(15b)の場合以上に「中間の使役主体」の介入を表現することはできない。次のように、動詞語幹に重複して接続できる使役接尾辞の数は、自動詞について最大3個まで、他動詞については最大2個までが限界のようである。

(16) a *köč-* 移る *köč-ür-* *köč-ür-t-* *köč-ür-t-tür-*

*kayt-* かえる *kayt-ar-* *kayt-ar-t-* *kayt-ar-t-tür-*

b *je-* 食べる *je-dir-* *je-dir-t-*

*karma-* つかむ *karma-t-* *karma-t-tür-*

但し、(16)は、使役接尾辞が二重ないし三重に付加可能な場合の例であって、どの動詞語幹にもこのように複数の使役接尾辞が付加できるというわけではない。

そして、二重の使役接尾辞がついた(15b)に関して注意しなければならないことは、これが、「中間の使役主体」と「動作の被使役主体」とをあえて同時に表現しよう

とすればこのようになる，ということであって，実際の用例では，このうちのどちらかが省略される場合がほとんどだということである。

- (17) a *At-tar-ï-n al-ïp, saray-dïn tör-ü-nö bayla-t-tïr-dï.*  
馬-複数-3 所-対格 取る-副動詞 宿-属格 隅-3 所-与格 縛る-使役-使役-過去-0 (3 単)  
「彼は馬たちを受け取って，宿の隅につないでおくように命じた」
- b *Bala-sï-na at kaytar-t-tïr-dï.*  
子供-3 所-与格 馬 守る-使役-使役-過去-0 (3 単)  
「彼は自分の子供に馬を守るように命じた」 (Yudaxin 1965 より)

しかしながら，(17)の場合，「中間の使役主体」と「動作の被使役主体」のうちのどちらかが省略されていると理解することも可能だが，別の解釈が成り立つ可能性もある。チュルク諸語の中には，(17)のような二重使役文が必ずしも「中間の使役主体」の介入を表すとは限らず，時に「強調」や「行為の複数性」を表す場合があるという<sup>9</sup>。しかし，キルギス語についても同様の解釈が成り立つのかどうかなど，詳しいことは分かっていない。今後の課題として残したいと思う。

### 3. 再帰的用法

キルギス語の使役文には，再帰的な意味を伴って用いられるものがある。本節では，このような使役文の再帰的用法について述べる。

Kudaybergenov (1987) は，ある主体がそれ自身に対するある動作を許容することを表す使役文の例として，次のような例を挙げている。

- (18) *Vrač-ka ukol say-dïr-dï-m.* 「私は医者注射を刺させた」  
医者-与格 注射 刺す-使役-過去-1 単

文字通りに解釈すれば，(18)で明示されているのは「私が医者注射を刺させた」ということだけで，誰が注射を刺されたのかは明確には分からないはずである。しかし，特に文脈などで指定がない限り，(18)において注射を打たれたのは「私」とであると解釈される。

次の例は諺であるが，ここでも使役形が再帰的な意味に用いられている。

<sup>9</sup> トゥヴェテ語について Kulikov (1993: 132)，トルコ語について Zimmer (1976: 412)を参照。

(19) *Ur-gan kiši — dōḡ menen, ur-dur-gan kiši — jol menen.*

殴る-GAN 人 丘 によって 殴る-使役-GAN 人 道 によって

「殴った人は丘によって、殴らせた人は道によって」

(勝者は偉そうに丘を歩き、敗者は下の道を行くの意)

この *ur-dur-gan kiši* 「殴らせた人」が表しているのは「(誰かを)殴らせた人」ではなく、「(自分を)殴らせた人=殴られた人」である。つまり、形式的には使役の形をとりながらも、意味的には受動を表していると言うことができる。

このように使役が再帰的・受動的に用いられる場合は他にもある。それは所有物や身体の一部が何らかの影響を受けた場合の表現である。具体的な例を見てみよう。

(20) a *But-u-n taš-ka ur-dur-du.* 「彼は足を石にぶつけさせた」

足-3 所-対格 石-与格 ぶつける-使役-過去-0 (3 単)

b *But-u-n tikenek-ke say-dīr-dī.* 「彼は足をトゲに刺させた」

足-3 所-対格 トゲ-与格 刺す-使役-過去-0 (3 単) (Yudaxin 1965 より)

c *Eteg-im-di it-ke jūl-dur-du-m.* 「私は裾を犬にむしり取らせた」

裾-1 単所-対格 犬-与格 むしりとる-使役-過去-1 単 (Kudaybergenov 1987 より)

d *But-um-du ayal-ga bas-tīr-dī-m.* 「私は女に足を踏ませた」

足-1 単所-対格 女-与格 踏む-使役-過去-1 単

それぞれの日本語訳はキルギス語の形式を反映させた形で「刺させた」「むしり取らせた」などの使役表現にしてあるが、実際の意味は、文の主語である使役主体が、そのような出来事を意図的に引き起こしたのではなく、非意図的にそのような出来事が起きた、ということである。意図的な場合の表現は、動詞の意味によって異なるが、例えば(20a,b)に対応する意図的な表現は、次のように、使役文ではなく形態的に単純な他動詞を述部にもつ文で表される。

(21) a *But-u-n taš-ka ur-du.* 「彼は足を(わざと)石にぶつけた」

足-3 所-対格 石-与格 ぶつける-過去-0 (3 単)

b *But-u-na tikenek-ti say-dī.* 「彼は足にトゲを刺した」

足-3 所-与格 トゲ-対格 刺す-過去-0 (3 単)

このように、所有物あるいは身体の一部が何らかの影響を受けたときの表現は、キルギス語と日本語の間に微妙な違いがあるので注意を要する。すなわち、日本語では、「足を石にぶつけた」というような他動詞表現は非意図的な場合にも用いら

れるが、キルギス語では意図的な場合に限って用いられる ((21a))。また、日本語なら「トゲに刺された」「むしり取られた」という受身の形式で表現されるような非意図的な受動表現が、キルギス語では使役の形式を用いて表される ((20b,c,d)) ということである。日本語にも「頭を働かせる」「口を尖らせる」のように必ずしも意図的とは言えない状態を使役の形式を用いて表すことがあるが、これは自動詞使役に限られるように思う。日本語において、キルギス語の(20)の例のような他動詞使役の形式を用いると、(20)の日本語訳を見ても分かるように、どうしてもそこに意図性が含意されてしまう。

また、(20a,b)と(21a,b)は外見上よく似ているが、文の構造は全く異なることにも注意しておかなければならない。つまり、(20a,b)における *ur-*「ぶつける」*say-*「刺す」という行為の行為主体は、それぞれ無生物の *taš*「石」であり *tikenek*「トゲ」であるが、(21a, b)における *ur-*「ぶつける」*say-*「刺す」の行為主体は文の主語（彼または彼女）である。このことから、(20a,b)の使役文における非意図性は、無生物を被使役主体に置くという構造から生まれるものだ、とも考えられる。しかし、(20c,d)の例では有生物である「犬」や「女」を被使役主体の位置に置いているので、被使役主体が有生物か無生物かということでは、(20)の使役文の非意図性を説明することができない。この問題は今後の検討課題としたい。

ところで、キルギス語には、再帰を表す接尾辞 *-(i)n-* が、使役接尾辞とはべつに存在する。例えば *ur-*「ぶつける」にこの再帰接尾辞が付加されると、*ur-un-*「ぶつかる」という新たな動詞語幹を派生する。(20)のような受動的・非意図的な表現はこの動詞再帰形を用いても表すことができる。

(22) a *But-u taš-ka ur-un-du.* 「彼の足が石にぶつかった」  
足-3 所 石-与格 ぶつける-再帰-過去-0(3 単)

b *But-u-n taš-ka ur-un-t-tu.* 「彼は足を石にぶつからせた」  
足-3 所-対格 石-与格 ぶつける-再帰-使役-過去-0(3 単)

インフォーマントによれば、(20a)の表現と(22)の間に意味的な大差はないが、(20a)のような使役の形式を用いる方が一般的だという。

#### 4. 使役接尾辞 *-dir-* と *-giz-*

1.1 で述べたように、キルギス語の生産的な使役接尾辞 *-dir-* と *-giz-* は、先行研究においては、動詞語幹の形態的・音韻的条件によって相補的に分布するかのよ

うに記述されている。しかし、実際には、1.1の(3)や(4)に示したように、両方の接尾辞の接続を許し、二つの動詞使役形を持つものがいくつかある。

二つの動詞使役形の中に微妙な意味の違いがあり、両者が使い分けられている場合がある、ということは既に述べた。だが、一つの動詞が形態的に異なる二つの動詞使役形をもつ場合について言及した先行研究は今のところ見当たらない。本節では、この意味の違いを具体的に見ていくことにするが、結論的に言えば、二つの動詞使役形の間の意味の違いは、一つ一つのケースによって異なっており、その使い分けのパターンは一樣ではない、ということである。以下に四つの使い分けパターンの例を挙げるが、これ以外に別の使い分けパターンがある可能性も十分にある。なお、以下の四つの使い分けパターンのうち、前二者は Yudaxin (1965) などの辞書記述から確認したもの、後二者はインフォーマントからの情報によるものである。

#### 使い分けパターン1：再帰用法専用の動詞使役形

辞書の記述を見ると、二つの動詞使役形の中に意味の違いはなく、単に「同じ」とされているものが多い。だが、中には意味の違いを区別して記されているものもある。

- (23) *say-güz-* 突き刺させる  
*say-dir-* 自分に突き刺させる

Yudaxin (1965) の記述によれば、(23)の通り、*say-güz-* は単に *say-* の使役形だというのみであるが、*say-dir-* はそこに再帰的な意味が含まれているとしている。*say-dir-* が再帰的な意味を伴って用いられる例は、(18)や(20b)に挙げたが、上記の辞書記述に従えば、*say-dir-* は再帰用法専用の動詞使役形だということになる。

#### 使い分けパターン2：自動詞使役での直接的な働きかけの使役と間接的・強制的な使役の区別

Yudaxin (1965) の辞書を見ると、自動詞 *jür-* 「動く、生きる、勤める」には、二つの動詞使役形があり、それぞれの意味は次のように記述されている。

- (24) *jür-güz-* 動かす, 行う, 遂行する  
*jür-dür-* *jür-* の意味のうち「動く」の使役形。動かす, 行かせる

それぞれの用例を比較してみると、これら二つの動詞使役形は、2.1で述べた自動詞使役における使役の意味的な違いが、動詞使役形の形態上に表されているのではないかと考えられる。すなわち、*jür-güz-* は被使役主体への直接的な働きかけに

よって「ある“できごと”を引き起こす」という使役 (causative) を, *jür-dür-* は間接的な働きかけによって「他の主体にある動作をさせる, 強いる」という強制的な使役 (factitive) を表すという区別があるのではないかと考えられる。

(25) a *Uyušturuu iš-ter-i-n jür-güz-bö-sö-k ...*

組織 仕事-複数-3所-対格 動く-使役-否定-仮定-1複

「もし我々が組織の仕事を行わなければ, …」

b *Suu boylo-p, tömön jür-dür-üp ...*

水 深さを測る-副動詞 下へ 動く-使役-副動詞

「水の深さを測りながら(=川に沿って)下流へ歩かせ, …」

### 使い分けパターン3：二重使役と単純使役

*ur-*「殴る」には, *ur-guz-*「殴らせる」と *ur-dür-*「(同)」の二つの動詞使役形がある。インフォーマントによれば, 両者はともに「殴るように強いる/命令する」という意味を表すが, *ur-guz-* は被使役主体が「殴る」という行為はせず, さらに別の誰かに「殴らせる」という場合, *ur-dür-* は被使役主体が直接「殴る」という行為を行う場合, という使い分けがあるという。つまり, *ur-guz-* は, 単独の使役接尾辞で, 2.3で述べた二重使役と同じような内容を表現できるということである。具体的な用例を見てみよう。

(26) *ǰuuču-ga kel-gen kīrgiz-dī, ǰurt-u-na ata-m ur-guz-du.*

仲人-与格 来る-GAN キルギス人-対格 身内-3所-与格 父-1単所 殴る-使役-過去-Ø(3単)

「仲人の所に来たキルギス人を, 身内の者に私の父が殴らせた」

(26)では, 父が「殴れ」と命じた身内の者が, さらに誰か他の人に命じて「殴る」という行為をさせたという意味になる。そして, このときの述部がもし *ur-dür-* であれば, 父が命じた者が直接「殴る」という行為をしたと解釈される, という。

### 使い分けパターン4：行為遂行の主体性

*je-*「食べる」の二つの動詞使役形, *je-giz-*「食べさせる」と *je-dir-*「(同)」の違いについては, 二重対格使役文の問題に関連して2.2.2で既に述べた。前者は, 使役主体が積極的に食事の用意をして無理やり食べさせるような状況と, また, 後者は被使役主体が主体的に食事をする状況と, 結びつきやすいという。ここでは, 行為遂行の主体性が使役主体と被使役主体のどちらにあるか, という意味で *-giz-*と *-dir-* が使い分けられているという可能性がある。但し, このデータは, インフ



オーマントが「自信はない」と前置きした上での情報であり、他に同じような使い分けがなされる場合は見つかっていない。

以上、四つのパタンの使い分けを見てきたが、異なる使役接尾辞における意味の使い分けは、*-giz-* と *-dir-* に限らず、他の使役接尾辞の間にも見られる。その一つが、上記パタン2と同じように、自動詞使役における使役の意味的な違いを形態的に区別する場合と、もう一つは、同音異義の動詞語幹を区別する場合である。

2.1で、自動詞使役における使役の意味的な違いは形態上区別されないのが原則だと述べたが、動詞のなかには、上記パタン2の場合を含め、次のように、両者が形態上異なる形で存在するものがいくつかある。

- |      |              |          |                 |          |                  |          |
|------|--------------|----------|-----------------|----------|------------------|----------|
| (26) | <i>kayt-</i> | かえる, もどる | <i>kayt-ar-</i> | かえず, もどす | <i>kayt-tir-</i> | 帰るように強いる |
|      | <i>köč-</i>  | 移る       | <i>köč-ür-</i>  | 移す       | <i>köč-tür-</i>  | 移るよう強いる  |

同音異義の動詞語幹に異なる使役接尾辞を接続することによって、意味を区別する場合の例としては、次のようなものがある。

- |      |                         |            |                                   |             |
|------|-------------------------|------------|-----------------------------------|-------------|
| (27) | <i>biš<sup>1</sup>-</i> | 熟す, 用意ができる | <i>biš-ir-</i>                    | 用意ができるようにする |
|      | <i>biš<sup>2</sup>-</i> | 振り混ぜる      | <i>biš-tir-</i>                   | 振り混ぜさせる     |
|      | <i>juu<sup>1</sup>-</i> | 洗う         | <i>juu-guz-</i> , <i>juu-dur-</i> | 洗わせる        |
|      | <i>juu<sup>2</sup>-</i> | 近づく        | <i>juu-t-</i>                     | 近寄らせる, 近づける |

(26)の *köč-* の例と、(27)の *biš<sup>1</sup>-*, *biš<sup>2</sup>-* の例を見ると、使役接尾辞 *-ir-* と *-tir-* の組合せで、一方は使役の意味的な違いを区別するため、他方は同音異義語を区別するため、という異なる役割を果たしていることが分かる。このことから、使役接尾辞 *-dir-* と *-giz-* の使い分けパタンが実に多様であるのも頷けると思う。

## 5. おわりに

以上、キルギス語の動詞使役形及び使役文について、その全体を概観してきた。使役接尾辞の分布に関しては、これまで、動詞語幹の形態的・音韻的条件により相補的に分布すると記述されてきたことについて、実は、同じ動詞語幹に異なる使役接尾辞が付加されることが少なからずあり、そこに意味における使い分けがなされている場合があることを指摘した。また、使役文について、これを自動詞使役文と他動詞使役文に分けて考察し、それぞれにおける被使役主体の格表示の現れ方の違

いを観察した。しかし、他動詞使役文における二重与格使役文や二重対格使役文、また、二重使役文について、今後もデータを集めて検討を加える必要がある。さらに、使役文の再帰的な用法についても言及したが、これについても、周辺言語の情報を含め、さらに調査を進めなければならないと考えている。

以上

#### 参考文献

- 川口裕司 1999 「現代トルコ語の使役構文－その意味と機能－」『言語研究IX』東京外国語大学
- 庄垣内正弘 1988 「キルギス語」『言語学大辞典』第1巻;1416-1422 東京:三省堂
- 胡振倅 1986『柯尔克孜語簡志』北京:民族出版社
- Comrie, B. 1975 “Causatives and Universal Grammar”, *Transactions of the Philological Society*, 1974 : 1-32.
- Imart, G. 1981 *Le kirghiz 1-2*. Aix-en-Provence: Publications de l'Université de Provence.
- Krippes, K.A. 1998 *Kyrgyz-English Dictionary*, Kensington: Dunwoody Press.
- Kudaybergenov, C. 1987 “Kategoriya zaloga”, In Zaxarova, O.V. (ed.) *Grammatika kirgizskogo literaturnogo yazika 1 : Fonetika i morfologiya*, 238-253. Frunze: Ilim.
- Kulikov, L.I. 1993 “The “second causative”: A typological sketch”, In Comrie, B. and Polinsky, M. (eds), *Causatives and Transitivity*, 121-154. Amsterdam: John Benjamins.
- Yudaxin, K.K. 1965 *Kirgizsko-russkiy slovar'*, Moskva : Sovetskaya Enciklopediya.
- Zimmer, K. 1976 “Some constraints on Turkish causativization”, In Shibatani, M. (ed.), *Syntax and Semantics 6, The Grammar of Causative Constructions*, 399-412. San Diego: Academic Press.

(おおさき のりこ, 京都大学大学院)

## On the Causative in Kyrgyz

Noriko OHSAKI

### Abstract

This paper is concerned with the morphology and syntax of causative in Kyrgyz, a Turkic language spoken by about 2.4 million people living in Kyrgyz Republic.

With a view to offer a brief survey of the Kyrgyz causative construction, the following topics are discussed:

- (i) causative suffixes and their distribution, i.e. which suffix attaches to a verb stem, and how a verb stem morphologically conditions the appearance of causative suffixes.
- (ii) case-marking in Kyrgyz causative construction, i.e. how the causer and causee are marked in the causative of intransitive, also in the causative of transitive, as well as in the double causative construction.
- (iii) reflexive use of causative.

Especially in (ii) the causative of transitive, the conditions of double-dative causative and double-accusative causative are also discussed.

In the section 4, I demonstrate the semantic difference between two distinct causative forms derived from a verb stem. The causative suffixes *-dir-* and *-giz-* (with vowel harmony variants) are used with some verb stems providing causative pairs whose members differ in meaning. I show four patterns of difference in meaning of the causative pairs.